『日本語学論集』第八号　二〇一二年三月

先行国書と三巻本『色葉字類抄』の関係
―『和名類聚抄』を中心として―

藤本　灯

はじめに
一　『色葉字類抄』中の典拠注記
二　和名抄の影響
三　展望

はじめに

院政期に成立した『色葉字類抄』は、内容面・排列面において『和名類聚抄』等の先行書の影響を受けていることが知られている。また本書は、和名抄のように典拠を添える方式を採らず、単に語の読み・漢字表記・一部意味用法のみを掲げることにより大量の語句（見出し語）を収録するスタイルを持つ辞書の一と言える。

さて、三巻本『色葉字類抄』中の典拠注記については峰岸明氏も、「本書の掲出語・掲出漢字の中には、時にその典拠をしめす注記が散見する」（中略）「式7　本朝式4　孝経3　左伝2　法華経2　或書2　月令1　名列律1　長恨歌1　百詠1　文集1　文選1　史記1　春秋文1　唱和集1　本草1　猿楽記1　新撰万葉集1　扶桑略記1　日本私記1　真言書1　医書1　有書1　すなわち、概言すれば、本書の引用典籍は、漢籍・国書に傾き、仏典の引用は比較的少ないと言うことができよう」（中略）「しかしながら、右のように掲出語・掲出漢字に典拠を明示すること、本書にあっては、実はきわめて稀なことなのである」とされている。［注1］

しかし、何故右の書名だけが記されたのか、これらの書物は書名の見えない他の部分でも引用されているのか、ここに示されない古辞書の影響は実際にはどの程度あったの

か（右記のものも孫引きであるのか）、ということについては、従来必ずしも明らかにされてこなかったようである。筆者はこれまで三巻本字類抄の畳字・重点・名字の各部収録語彙の主に同時代における位相や辞書内部の排列についての研究調査を行ってきたが、本稿では本書の成立とそれ以前に視点を移し、先行国書のうち特に『和名類聚抄』と三巻本字類抄の語彙収録状況を照合しながら、この問題を考えてみたいと思う。［注2］

一　『色葉字類抄』中の典拠注記

三巻本『色葉字類抄』内の全典拠注記とそれに準ずる計七〇例を出現数順に示せば、以下の様である［注3］。また二例以上に見える出典については、「該当例の和名抄における掲出状況」［注4］及び「該当出典を含む和名抄項目の、字類抄への引用状況」を本稿末に示した。→出典考

【式（式文）】十語（→本朝式）

①構　同（チハヤ）式云／ー一領（雑物・上67ウ3）
②栗黄　カチクリ／式云ーー一斗（飲食・上98オ7）
③閲　（ナラフ）見式批如擿／批也已上並也（辞字・中黒36オ8）
④曝　（アラハス・アラハル）式文（辞字・下37オ7）
⑤楷　同（シモト）／式云馬場／埒斬ー（植物・下69ウ5）
⑥羔塵　ショウチン／式云身屋以帛／浪ーー為之也（雑物・下75オ1）
⑦冷槽　ヒヤシフネ／式云俗／槽ーー（雑物・下95オ2）
⑧萌　小麦ー一斗式／同（モヤシ）（飲食・下103オ1）
⑨槎　（モム）七何反／式云ー乾（辞字・下104オ7）
⑩清（瀆）菜　スヽヲリ　須々保利　式云菁根／ーーーー／同欤（飲食・下115ウ5）

【文集／白氏文集】五語（→長恨哥）

①排　（ツラヌ）見文／集（辞字・中黒26オ8）
②支頤　ツラツエツク／吟苦シテ支頤ヲ暁燭ノ前／白氏文集（畳字・中黒28ウ2）
③強　見文集／已上同（ナマシヒ）（辞字・中黒36ウ8）
④挍　同（ヤヽモスレハ）／見文集（辞字・中黒87オ6）
⑤長　（アマル）去声／文集（員数・下34オ1）

【本朝式】四語（→式（式文））

①鰌魚　ハラカ　腹赤　同俗用也／出本朝式（動物・上22ウ4）
②行纏　（テン）ハヽキ今俗／編筒為ーー也　脛巾　同／本朝式用之（雑物・上26オ5）
③賢木　同（サカキ）／本朝式用之（植物・下43ウ1）
④袴奴　（コト）サシヌキノハ／カマ／俗云指貫　差貫　同　絹狩袴　本朝式用／三字／同（サシヌキノハカマ）（雑物・下47ウ5）

【或本】四語

①丁瘡　チヤウサウ俗／或本作疔（人体・上66ウ7）

②竹生嶋　チクフシマ／生字或本用夫字（諸社・上71ウ1）
③弦袋　ユミツルフクロ　槖　同音記／或本弓袋同（雑物・下67ウ6）
④景行　メマキスカタ／又ナサケ／或本上无／字有（畳字・下黒60オ8）

【或説】三語
①人民　ニンミム／或説云オホムタカラ（人倫・上37オ5）
②横巷屋　ホウケイカイヘ／或説用普／賢屋三字云々（地儀・上41ウ5）
③崗　（カウ）同（ヲカ）／或説罡（地儀・上80オ1）

【一（云）】三語
①寶倉　ホクラ／一云神殿（地儀・上41ウ5）
②褌脱　盤渉調／一云散楽（人事・中黒74ウ7）
③宴飲樂　壹越調／一云飲酒樂（人事・下15ウ3）

【孝経】三語
①勢　同（ヘノコ）／見孝經（人体・上50ウ6）
②曳　見孝経／已上同（カムカフ）（辞字・上105オ2）
③推　見孝経／已上同（ユツル）（人事・下67オ4）

【左伝】二語
①儆　（イマシム）左傳（辞字・上11オ4）
②注　已上同（ハグ）造矢也見左傳／又ハク以笑—弓也（辞字・上29オ4）

【法華経】二語
①執　（トラフ）法華経／—（辞字・上59ウ7）
②唾𠸄　カマフ／見法花經（畳字・上111オ1）

【新撰万葉集】二語
①女倍芝　同（ヲミナヘシ）　新撰／万葉集用之（植物・上80オ4）
①蘭　落干反／フチハカマ／一名新／百葉集用藤袴（植物・中黒101ウ2）
*二巻本世俗「新撰万葉」、二巻本色葉「新万葉集」、和名抄「新撰万葉集」

【扶桑略記】二語
①齒　（ツラヌ）—法曹扶／桑略記（辞字・中黒26ウ1）
②刮　コソク／見扶桑略記（辞字・下8ウ6）

【日本記】二語
①唁　（フ）日本記曰／ネク（人事・中黒30オ8）
②慯　（クライ又クロウス）—学也／見日本記（辞字・中黒77ウ3）

【史記】二語
①仡　魚訖反／オソクシタリ／史記乍扢（人事・中黒66オ2）
②苦　（ユカム）器—／—𥳑／史記（辞字・下68ウ3）

【文選】二語
①鵠　同（フネ）／見文選（雑物・中黒103ウ3）
②付　同（サツク）／見文選（辞字・下49オ6）

【或人】二語
①粲　キラメク／或人云勉用之（辞字・下60オ7）
②薪　ミカマキ／或人云御—（雑物・下黒64オ2）

【月令】御　已上同（ハヘリ）／見月令（辞字・上29オ7）

【名例律】増　（ヘナル・ヘカル）名例律／云—（辞字・上52オ4）

【猿楽記】尿　トリトコロ　取所也／見猿楽記（人事・上56ウ5）
【或書】衲　ヌサスフ／ヌサスソ／或書云衣縫（辞字・上78ウ2）
【列子】風　カセ／フウ／列子　銅烏（天象・上91オ4）
【周公】符　（カナフ）ー周公／薬（辞字・上103ウ3）
【長恨哥】（→文集／白氏文集）　搔蹙　（カイツクロフ）見長恨哥（辞字・上105ウ6）
【孔子】仆　（タフル・タフス）孔子／ー是也（辞字・中黒7ウ3）
【＊】予　ソホツ／見胤紹／玉玉鏡（辞字・中黒18オ6）
【長干賦】干　（ツクル）見長ー賦／已上造也（辞字・中黒26ウ5）
【毛詩】勞　（ネキラウ）ー毛詩（辞字・中黒31オ5）
【国史】宇治　ウチ／国史乍兎道（国郡・中黒54ウ4）
【＊】精　（セイ）（クハシ）　ー古今（辞字・中黒77オ8）
【＊】卒死　マクレ　大外記僕後記（信俊説）也主祝／頭知康云アタシニ（人体・中黒90ウ5）［注5］
【百詠】今宵　コヨヒ／在百詠（天象・下1ウ5）
【格】金肅　見格（諸寺・下13オ3）
【真言書】交　見真言書／已上同（アサウ）（辞字・下36オ3）
【日本私記】坂樹　同（サカキ）／日本私記用之（植物・下43オ7）
【医書】人　同（サネ）／醫書桃李杏／等ー也（植物・下43ウ3）
【春秋文】不　（シツカニ）見春／秋文（辞字・下77オ6）
【唱和集】春根　モトノメ／唱和集（人倫・下102オ1）
【本草】捻　（モム）儒隹反／又奴禾反／又乃四反／本草云ー洗（辞字・下104オ7）

〈表1-1〉出典名別出現回数

出典名	出現回数
式(式文)	10
文集／白氏文集	5
本朝式	4
或本	4
或説	3
ー(云)	3
孝経	3
左伝	2
法華経	2
新撰万葉集	2
扶桑略記	2
日本記	2
史記	2
文選	2
或人	2
(以下略)	1

〈表1-2〉出典名の字類抄部別出現回数

部	出現回数
天象	2
地儀	3
植物	6
動物	1
人倫	2
人体	3
人事	6
飲食	3
雑物	8
光彩	
方角	
員数	1
辞字	29
重点	
畳字	3
諸社	1
諸寺	1
国郡	1
官職	
姓氏	
名字	

〈表1-3〉出典注記方法別出現回数

出典注記法	出現回数
見ー	21
ー	18
ー云	17
ー用	8
ー作	3
ー出	1
ー日	1
在ー	1

以上延べ七〇例の内訳は〈表1-1・2・3〉の通りであり、巻別では上巻二四例、中巻一九例、下巻二七例であった。部別では圧倒的に辞字部収録語が多いが、和名抄のような事物の名称を中心とした辞書からは語句の出典名を省きながら採録していたことが背景にあるだろう。また「見文選」のような注記形式は書物や文脈により一定の偏りが見られるものの、必ずしもその方針が完全に統一されているわけではなさそうである。

二　和名抄の影響

「色葉字類抄」と「和名類聚抄」の比較調査については、既にいくつかのまとまった論考がある。しかし、各氏の調査方法・調査範囲は区々であり、現在までに、全体としてどのようなことが明らかになっているのかは必ずしも明瞭な形で我々に示されていないように思う。主な研究の成果を便宜的にまとめれば、次頁〈表2-1〉のようになる。（原文の引用部分は「　」で示した。諸本の範囲は論文に明記されたものを示した）。

この表を見ると、字類抄の中でも、限られた部（主に①天象～⑨雑物（⑦人事を除く））を扱ったもの、和名抄の和訓のみを対象にしたものの結果が主だってあり、字類抄を母体として、全体の語の中での和名抄語彙の位置付けを明確にしたものは少ないということが分かる。そこで本稿では、従来の調査への補填作業の一環として、「色葉字類抄」収録語彙を母体とした次の調査を行った。

□和名抄収録語彙と三巻本字類抄「⑩光彩部」所収語彙との比較調査

「光彩部」はこれまで和名抄との共通語彙が少ないとされ、積極的に調査対象とされてこなかった部のひとつである。三巻本字類抄［注6］「光彩〈付繪丹并繪色等〉」部収録語数は延べ二四〇語で、うち二字以上の熟語が五四語、音読みに拠り収録された語［注7］が二六語（うち熟語が二四語）である。

〈表2-2〉は、二四〇語のうち「和名抄と一致する」「二字以上の熟語である」「音読語として収録されている」の少なくともいずれか一要素を満たす計六三語についての情報である。和名抄との重複語四五語のうち熟語は三八語、音読みに拠る語は一八語（全て熟語）であった。

〈表2-1〉

論文題名	著者	字類抄範囲	和名抄範囲	論旨
『箋注和名類聚抄』校例提要	狩谷?斎	(10巻本伊呂波)	—	・「類聚名義抄伊呂波字類抄間似拠二十巻本者」
伊呂波字類抄の成立に就いて	河村1936	主に10巻本伊呂波	—	・「和名抄は三巻本成立の資料としても用あられてはゐるが、より多く十巻本には利用せられた形跡がある」 ・「但しその準拠した処の本は如何なる系統の本であるかは不明である。これは類聚名義抄の場合と同様に、二十巻本系統のものに近いと云ふことは明らかであるが、或は岡田希雄氏の類聚名義抄研究中に述べられた如く、「だが然し更に疑へば和名抄には十巻本、廿巻本以外に別にまた其の中間に位するやうな中間本とでも云ふ可きものがあつたのではなからうか」とも思はれるのである」(説字訂正)
『古辞書の研究』120頁	川瀬1955	—	—	・「増補二十巻本が世に出た為、その影響を蒙つて色葉字類抄の方も同性質の部門を増補したのではあるまいか」
前田本色葉字類抄と和名類聚抄との関係について	峰岸1964	3巻本色葉(前田本のみ)の天象～雑物部(人事部を除く)	10巻本(箋注、大須本)、20巻本(道円本、高山寺本)＊(10巻本に欠ける歳時・職官・国郡は採らない)	・2訓記された表出漢字で、その和訓がともに和名抄と共通のものが102例ある。 ・和名抄の「俗云」「一云」「一訓」「俗呼」「俗用之」「亦作」「作」注記や、出典を持たない「今案」「俗」注記などが字類抄に一致し、直接の影響関係が予想される。 ・漢文注について、和名抄を介した引用かと推測されるものがある。 ・「具」注記の名称も、和名抄(10巻本か)の部類名の影響があるかとも思われる。 ・20巻本和名抄のみに存する「歳時部」「職官部」「国郡部」のうち、「歳時部」「職官部」については、字類抄との関係を積極的に立証するすべは見出せない。 ・色葉字類抄の編纂の重要な資料となつた和名抄としては「本来二十巻本の組織をもちながら、その本文が現存十巻本のごとき内容を有するもの」が想定される。それは「現存本の中では高山寺本のごとき内容を有する二十巻本系統の一本であろう」、ただし「高山寺本そのものでない」疑いがあるとする。
		3巻本色葉(前田本・黒川本)の地儀・国郡部	20巻本	・色葉字類抄の排列順序は、20巻本和名抄巻5における国名の次第を踏襲している。＊「なお、延喜式巻二二民部上に全く同種の記事があり、字類抄は直接これによつたものかとも疑われるのであるが、本文比校の結果、字類抄「国郡」はやはり和名抄を介して考えるのが穏当のようである」(衍字等訂正) ・同様に、国名の下位の郡名の次第もほぼ一致する。＊和名抄巻6～9の郷里名よりも、巻5と合致する。 ・地儀部の宮殿名等の次第、また固有名詞の次第も、20巻本和名抄にほぼ完全に一致する。
三巻本色葉字類抄における和名類聚抄和訓の受容	村田1982	3巻本色葉	〈比較母体〉20巻本(道円本)のうち巻5-9(職官部・国郡部)、巻12のうち香薬部を	・和名抄中和訓を有する2194語中2078語(約95%)が字類抄に見出せる。 ・字類抄中に見出せなかつた116語のうち、「弁色立成」「楊氏漢語抄」「日本紀私記」「高橋氏文」などを出典とする和訓(死語か)、また助詞の「の」を介した語や句が散見される。
色葉字類抄における掲出語の増補について—和名類聚抄との比較を通して—	原1983	〈比較母体〉節用文字・2巻本世俗・3巻本色葉のうち天象・地儀部のヌ～ム篇(ヲ篇を除く)、植物・動物・人倫・人体・飲食・雑物部のヌ～ヨ篇(ヲ篇を除く)	10巻本、20巻本	・原節用文字(独自に想定したもの)から3巻本色葉への増加見出語(左記範囲)102例中56例は和名抄に登載されている。 ・2巻本世俗登載語(左記範囲)452例中389例(約86%)が和名抄に登載されている。 ・2巻本世俗成立時とその増補にあたり一度ずつ和名抄を利用している。
色葉字類抄における和名類聚抄掲出語の受容—特に「人体」部について—	村田1984	〈比較母体〉3巻本色葉・2巻本世俗の人体部	20巻本(道円本)	・3巻本色葉人体部472語中321語(約2/3)が和名抄(ほぼ巻3形体部)に見出せる。 ・また「3巻本色葉と2巻本世俗の共通語」346語と和名抄に共通する語は289語で、約83.5%が一致している。 ・さらに289語のうち掲出漢字がすべて和名抄に見出せるものは256語で約88.6%、また字類抄初掲字については二例を除き全ての語が和名抄に見出せる(約95%)。 ・字類抄が和名抄中の語を採用する際、漢字表記までも採用しており、和名抄以外の資料から採用する場合も、和名抄を優先して採用したのではないか。字類抄「人体部」編纂にあたつては、ごく早い段階で、和名抄が頻繁に利用されたのであろう。
「類聚名義抄」「色葉字類抄」所引の「和名類聚抄」	佐佐木1984	3巻本色葉のうち任意の数十例	10巻本(松井本)、20巻本(道円本)のうち任意の数十例	・名義抄所引本と20巻本和名抄、字類抄所引本と10巻本和名抄の内容が近い。 ・現存20巻本和名抄の巻1・2・3・10の4巻に改編が加えられたのは鎌倉中期以後で、名義抄や字類抄はこの改編を経ない古い本を引用している。 ・色葉字類抄に引用された和名抄も原撰本系の一本であつた可能性が大きい。 ・名義抄と字類抄に引かれた2種の和名抄の本文にはそれなりの相違がある。
「いろは字類抄」と『和名類聚抄』	三宅1987	〈比較母体〉字類抄諸本(節用・世俗・色葉・伊呂波)の主にヌ篇(チリルヲ篇も適宜参照)	〈比較母体〉10巻本、20巻本	・原形本や節用文字は和名抄により直接・積極的に増補されたとは考えられない。 ・2巻本世俗、2巻本色葉、10巻本伊呂波の成立段階で一度ずつ積極的に和名抄を利用している。 ・2巻本世俗の増補では10巻本和名抄を用い、それ以外の場合は20巻本系統を用いた可能性がある。

〈表2-2〉

○…一致、該当するもの（字類抄諸本については、見出し語の一致（異体字も可とする）を以て○とし、前掲語の注文内に存するものや用字の若干異なるものを△とした）
●…用字、和訓に若干の異同があるもの
◎…和名抄掲載語の注文内にあるもの
▼…字類抄別部所収語と対応し、光彩部との直接的な関係が希薄であると推定されるもの
▽…その他

通番号	篇	各篇光彩部総語数／各篇光彩部中の掲載順位	二字以上の熟語	音読語	元和本和名抄所在（掲載順位を付す）（⑬⑭の該当類中の）	和名抄との誤差	節用文字	二巻本世俗字類抄	二巻本色葉字類抄
1	イ	8/9	○				−		○
2	ロ	1/2	○	○	⑬12オ8/11		−	○	○
3	ロ	2/2	○	○			−		
4	ハ	3/3	○		⑭10オ2/15		−	○	○
5	ト	1/1	○	○	⑬12ウ10/11		−	○	○
6	ワ	1/1	○	○			○	○	○
7	カ	33/35	○		⑭11オ10/15		○	○	○
8	カ	34/35	○		⑭11オ10/15	◎	○	○	○
9	カ	35/35	○				○		○
10	タ	1/2		○			○	○	○
11	タ	2/2	○	○			○	○	○
12	ツ	1/5	○		⑭11ウ14/15	◎	○	○	○
13	ツ	2/5			⑭11ウ14/15	◎▽			○
14	ツ	3/5	○		⑭11オ11/15			○	○
15	ツ	4/5	○		⑭11オ11/15	◎			○
16	ツ	5/5			⑭10ウ5/15		○	○	○
17	ム	1/2			⑭10ウ7/15	●	−	○	○
18	ム	2/2	○		⑭10ウ7/15	◎	−		○
19	ク	1/40	○		⑭11オ8/15	●	−	△	○
20	ク	31/40			①13ウ	▼	−	○	○
21	ク	33/40	○				−		○
22	ク	34/40	○	○	⑬12オ5/11		−	○	○
23	ク	35/40	○		⑭10オ4/15		−		○
24	ク	36/40	○		⑭10ウ4/15	◎	−		○
25	ク	38/40	○				−		○
26	ク	39/40	○	○	⑬11ウ2/11	◎	−		△
27	ク	40/40	○	○	⑬11ウ2/11	◎	−		○
28	ヤ	1/1	○		⑳2ウ	▼	−	○	○
29	マ	2/2	○				−		○
30	コ	1/7		○			−	○	○
31	コ	2/7	○	○	⑬12ウ11/11		−	○	○
32	コ	3/7	○	○	⑬12オ6/11		−	○	○
33	コ	4/7	○	○			−		○
34	コ	7/7	○	○			−		○
35	エ	1/3	○	○	⑬11ウ3/11	●	−	○	○
36	エ	2/3	○	○	⑬11ウ3/11	●◎	−	△	○
37	エ	3/3	○	○	⑬11ウ3/11	◎	−		○
38	ア	28/45			⑭10ウ6/15		−	○	○
39	ア	29/45			⑭11オ9/15		−	○	○
40	ア	30/45			⑭11オ9/15	▽	−	○	○
41	ア	36/45	○				−		○
42	ア	37/45	○		⑭11オ12/15		−		
43	ア	38/45	○		⑭11ウ15/15		−	○	○
44	ア	39/45	○		⑭11ウ15/15	●◎	−	○	○
45	ア	40/45	○		⑭11ウ13/15		−	○	○
46	ア	41/45	○		⑭11ウ13/15	◎	−		○
47	ア	42/45	○		⑭11ウ13/15	◎	−	△	○
48	ア	43/45	○				−	○	○
49	ア	44/45	○		⑬12オ8/11		−		○
50	キ	5/7	○		⑭10オ3/15	◎	−	○	○
51	キ	6/7	○				−	△	○
52	キ	7/7	○	○			−	○	○
53	シ	15/18	○	○	⑬11ウ2/11	●	−	○	○
54	シ	16/18	○	○	⑬12オ9/11		−	○	○
55	シ	17/18	○	○	⑬12オ9/11	◎	−		○
56	シ	18/18	○	○	⑮14ウ		−	○	○
57	ヒ	14/16	○	○	⑬12オ7/11		−	○	○
58	ヒ	15/16	○		⑭11ウ14/15	●	−	○	○
59	モ	2/3	○				−	○	○
60	モ	3/3	○				−		△
61	セ	1/1	○	○	⑬12オ4/11		−		○
62	ス	1/4	○	○	⑭10オ1/15		−	○	○
63	ス	2/4	○	○	⑬11ウ2/11	●	−		○

1光彩 2緑青 3緑衫 4黄櫨 5同黄 6黄土 7黄草 8刈安草 9火色 10丹 11陶砂 12椿灰 13柃 14鴨頭草 15押赤草 16橡 17紫 18芘蒡 19紅花 20涅 21貫染 22空青 23梔子 24支子 25黒橡 26光明丹 27光明朱 28欵冬 29繊染 30紺 31胡粉 32金青 33紺青 34紅雪 35燕脂 36烟子 37焉支 38茜 39藍 40澱 41青驪 42赤蒐 43灰汁 44淋灰 45黄灰 46冬灰 47藜灰 48退紅 49緑青 50黄蘗 51黄皮 52麹塵 53朱沙 54雌黄 55金液 56朱漆 57白青 58柃灰 59萌黄 60萌木 61青黛 62蘇枋 63朱沙

字類抄の「光彩部」は、傾向として①光炎②色彩③染色④絵丹⑤色目のような排列順序があるとされるが［注8］、和名抄との一致例は、このうち③④に当たるものが主である。これは、一致例のほぼすべてが和名抄巻一三「図絵具」か巻一四「染色具」に収録されていることからも分かるが、また和名抄を母体として眺めても、「図絵具」一一語中一〇語、「染色具」

一五語中一二語（注文内掲出を含めれば全語）が字類抄光彩部でも立項されているのである。また、和名抄で「雌黄」の注文内に在った「金液」（注7参照）が字類抄では「雌黄　シワウ　金液　同」のような連続項目としシ篇に残されたままになっていることも、和名抄からの摂取を裏付ける一要素と成り得るであろう。ただし必ずしも和名抄の排列が保存されていないことは［注9］、字類抄の編纂方針に関わる問題として追考する価値がある。

また、和名抄との一致語で多くを占めた巻一三・一四以外に巻一五「膠漆具」所収の「56朱漆」が現れたことを契機として、「膠漆具」所収語を字類抄に求めたところ、以下のような結果となった。［注10］

〈膠漆具〉（和名）　字類抄音訓・所在

①膠　ニカハ　〈カウ〉ニカハ　ニ雑物上38オ6
（「ヤニ」ヤ植物中黒83ウ1）
②漆★　ウルシ　ウ雑物中黒51オ1
③朱漆★　★シュシチ　シ光彩下75オ4
④金漆　コシアフラ　★コムシチ　コ雑物下7オ1
（「金漆樹　コシアフラノキ／コムシツ俗」コ植物下2ウ7）
⑤掃墨　ハイスミ　〈サウ〉ハイスミ　ハ雑物上27オ6
⑥鬃筆　ハケ　〈シ〉ハケ　ハ雑物上27オ3
⑦錯子　コスリ　〈サク〉コスリ　コ雑物下7オ7
⑧木賊　トクサ　〈ソク〉トクサ　ト植物上55オ1
⑨椋葉　ムクノハ　アヲヒエ　アヲヒエ　ア雑物下32ウ7
⑩金銀薄★　ヲシカハ　〈ヰ〉ヲシカハ　ヲ雑上82ウ6
⑪竹刀　ツクリカハ　〈カク〉ツクリカハ　ツ雑物中24ウ1
⑫韋　（「カハコロモ」カ雑上100オ1、「カハ」カ雑上98ウ6）
⑬革　★ラフ　ラ雑中黒40ウ1
⑭蝋★

右のように、ほとんどの語が字類抄に収録されていることは従来の指摘通りであるが、語の摂取方法に注目すれば、

□和名抄に和訓のない語も訓読み或いは音読みによって取り込まれていること

□「金漆」のように和訓のある語でも、字類抄で音読のみの掲出である場合のあること

□字類抄との重複語一二語中一〇語が雑物部に採られていること

□ただし、和名抄出典語彙の連続掲出は見られないこと（④⑦・⑤⑥所在参照）

のような事象についての指摘を加えることが出来るだろう。なお、和名のある「椋葉」が字類抄に掲載のないことは、村田氏（1982）にも言及があるように、色葉字類抄が、複合和語を最小単位に分割して収録する方針があったためと想像される。［注11］

また、これらとは別に、三巻本字類抄に「和名―」形式の注記が次の三例（A～C）見つかった［注12］。「和名」

は和名抄からの引用を窺わせるが、和名抄の用字や和名を踏襲しているわけではない。

A　櫟椋　〈レキキウ〉イチヒノカサ／和名云／イチヒノサネ（植物・上4オ3）

和名抄廿⑰12オ　菓蓏部・菓具

櫟椋　爾雅云櫟其実椋〈音求和名以知比乃加佐〉孫炎曰菓之自裹者也

B　馬厩　〈サツ〉ムマクシ／和名ムマハタケ（雑物・中黒44オ7）

和名抄廿⑮4ウ　調度部・鞍馬具

馬刷　漢語抄云馬刷〈于麻波太氣下所劣反〉

C　舷　〈クワン〉フナタナ／和名フナハタ（雑物・中黒103ウ4）

和名抄廿⑪4オ　舷部・舟具

枻　野王案枻〈音曳字亦作栧和名不奈太那〉大船旁板也

さて、本章ではわずかに

・和名抄巻一三「図絵具」・巻一四「染色具」→字類抄「光彩部」へ

・和名抄巻一五「膠漆具」→字類抄「雑物部」へ

との傾向を示し得たにすぎないが、その調査過程では、先行研究に加えるべき次の視点を得た。

□字類抄中で和名や「物の名」の少ないとされる部についても、特に熟語を中心に再度比較調査を行う必要があること

□見出し語（漢字表記）の一致のみでなく、和名抄の注文内に「一名―」「漢語抄云―」とある語についても、比較調査の対象とすべきこと

□和名抄に和訓のない項目の字類抄への摂取状況についても調査すべきこと

□和名抄に和訓がある項目が字類抄で音読掲出のみの場合についても考慮すべきこと

□和名抄中の「類」「具」などのまとまりが、字類抄の「部」等とどのように関連しているか、またその排列（必ずしも和名抄の排列が保存されないこと）についても再考すべきこと

□見出し語（漢字表記）が一致していても注文が異なる場合、和名抄を典拠とする一致項目とすべきか再考すべきこと［注13］

また、和名抄・字類抄の比較研究において両書の諸本についての視点が不可欠であることは言うまでもないが、それも右の課題に基づく調査の進展によって更に明らかにな

るものと期待される。

三　展望

本稿では、三巻本『色葉字類抄』について、出典名が一例も見られないにも関わらず従来密接な関わりを指摘されてきた和名抄からの引用態度を中心に扱ってきたが、ここでは前章の結論をいちいち繰り返さない。

先行研究では他に、本草書［注14］・漢詩文・古記録・古往来・訓点資料・和漢混淆文など様々なジャンルの文献語彙との関連、また部単位では姓氏部・名字部と『掌中歴』、字類抄部立については天理図書館蔵『平安韻字集』との関連も指摘されている。先行古辞書では三宅ちぐさ氏による『新撰字鏡』との比較調査がある［注15］。しかし例えば漢詩文・古記録・古往来語彙については、それら特有の語が字類抄に採録されていることは周知の通りであるものの、字類抄編纂の材料となったであろう特定の書物についての指摘は少なく、実際にはこの同定は非常に難しいものと考えられる［注16］。それは無論、字書や本草書のように注記や排列を含めて検討できるものばかりではないからであり、その書物特有の語であると立証されることが難しい以上、「位相や素地の共通性」の指摘に止まらざるを得ないからである。また韻文や散文から語を採録する場合、字類抄がその使用語を逐一採用した保証はなく、数語しか一致しなくとも参考資料でなかった証拠とはならない。

しかし、少なくとも色葉字類抄に収録された語彙の性質を考えるに当たり、独自性の大きい畳字部の熟語や辞字部の一訓多字と共に、「天象」以下「事物の名」の部や先行書からの引用という点についても未だ調査課題が多いということは、本稿で示し得たところである。字類抄編者の新たに採用した語の位相のみならず、先行書からの取捨選択・再排列方法を明らかにすることにより、彼の目指した辞書像が浮き彫りになるものと考えられるが、またその像の敷衍により、前述の調査上の難点が補われることも大いに期待されるのである。そのためには、本稿で行ったような和名抄との再比較調査や、今回対象としなかった他の書物についての同様の検討も有意義なはずである。

最後に、本稿末に掲げた「出典考」により本稿の内容の補強された点を、改めて確認しておきたい。「はじめに」で述べた通り、『色葉字類抄』は原則として語の出典を示さないスタイルを持つ辞書である。和名抄の大部分の見出し語を取り入れたにも関わらず、原文に存在した出典注記の殆どは採録過程で削られており、これを継承することは稀である。一方で字類抄に示された出典注記は必ずしも和名抄の孫引きのみならず、編者当人の知識或いは別書に拠り補

われた例が少なからず存在していることが、本調査で明らかになった。字類抄編者が必ずしも「出典注記」という一つの形式自体を全面的に排除しようとしたものではなく、必要と考えられる場合（出典考における「新撰万葉集」の例等）に最小限これを残したと考えるのが妥当であると言えるのではないだろうか。

なお、出典注記の最も多かった「式」字類抄との関係については、改めて別稿に論ずる予定である。

出典考

【式】

別稿参照。

【文集／白氏文集】

漢籍の中では最も多い書名表示である（ただし②を始めとして黒川本独自の注である疑いも残る）。部別では辞字3、畳字1、員数1で、実字はなく、①～⑤ともに新撰字鏡・和名抄・図書寮本名義抄には掲載がない。和名抄中の「文集」「白氏詩」引用項目を字類抄と照合すれば左の如くであり、「具」注記で和名抄に拠ることを窺わせる一方で、「文集」の書名は引かない。字類抄中の文集については船城氏（2007・2009）に御論稿がある。

「鴈齒　白氏文集云鴨頭新緣水鴈齒小紅橋」（廿⑩19ウ居處部・道路具）→「鴈齒　カンシ／橋具也」（地儀・上92オ2）、「裙裳（裙帶附）　釋名云上曰裙（唐韻云音與群同字亦作裳）下曰裳（音常和名毛）白氏文集云青羅裙帶（裙帶此間云如字）」（廿⑫20ウ裝束部・冠帽具）→「裙帶　クンタイ／裝束具」（雜物・中黒76オ5）、「白犀帶　白氏詩云通天白犀帶照地紫麟袍」（廿⑫24ウ裝束部・置帶類）→なし、「書櫃　白氏文集云破柏作書櫃（和名布美比都）」（廿⑬10ウ調度部・文書具）→「書櫃　（ショクキ）フミヒツ」（雜物・中黒103ウ7）、「紫陽花　白氏文集律詩云紫陽花（和名安豆佐為）」（廿⑳3オ草木部・草類）→「紫陽花（シヤウ）アツサキ」（植物・下26ウ1）

【本朝式】

別稿参照。

【或本】

①和名抄廿③24ウ　形體部・瘡類「丁瘡　千金方云治丁瘡方云丁（或本丁作疔未詳）」

③和名抄廿⑬16オ　調度部・弓劍具「弓袋　説文云韔（音帳和名由美布久呂）弓衣也唐式云弓袋」「弦袋　唐式云諸府衛士弦袋（由美都流布久路）」であるが、」

②④は和名抄に見えない。和名抄中の「或本」は①の例のみであるが、字類抄はこれを引く。

【或説】

①和名抄廿②10ウ　人倫部・微賤類「人民　日本紀云人民（和名比止久佐）一云（於保太加良）」

③和名抄廿①6ウ　地部・山谷類「岡　丘也正作崗」

①は和名抄の「一云」を「或説」に変換したものとも考えられるが、「一（云）」「或本」　「或人」「或書」また「正」「俗」との比較における使い分けの有無も現段階では不明である。和名抄の中の「或説」は「或説云…（也）」の形で語義等を説明することが多いようであるが、文集の例と同様、「或説」の形式が字類抄に引かれる例はない。

【一（云）】

①和名抄廿⑬8ウ　調度部・祭祀具「賓倉　漢語鈔云賓倉（保久良）一云神殿」

②和名抄廿④17オ　音樂部・曲調類「盤渉調曲　（略）劔気褌脱（褌脱一云散樂）（略）」

③和名抄廿④14ウ　音樂部・曲調類「壱越調曲　（略）宴飲樂（一云飲酒樂）（略）」

いずれも和名抄を引いたものと考えられる。ただし和名抄中には「一云」の形式が数多く用いられるが、字類抄に継承されたものは本三例のみである。

【孝経】

①和名抄廿③16オ　形體部・莖垂類「陰核　食療經云食蓼及生魚或令陰核疼（陰核俗云篇乃古）刑徳教云丈夫淫亂割其勢（勢者則陰核也）」

名詞のみ和名抄に見える。和名抄中の「孝経」は「孝経序」も含めて二例で、左の様であるが、注記形式・内容は字類抄に継承されない。

「弟子　孝經序云門徒三千人又云貫首弟子」（十①96オ人倫部・男女類）→「弟子　テシ」（人倫・下19ウ3）、「父母　孝經云身體髮膚受于父母父（加曽）母（伊呂波）俗云父（和名知々）母（波々）爾雅云父為考（好反）母為妣（田履反）集注舎人曰生稱父母死時稱考妣一云恵公者何隠之考也仲子者何桓之母也明非死生之異稱矣一云阿耶（知々）阿嬭（波々）」（廿②14オ　親戚類・父母類）→「父母　人倫部／――分」（疊字・中黒106オ5）

【左伝】

和名抄中の「左伝」は左の一例のみである（「左伝注」は五例）。字類抄は出典名を引かない。

「食指　左傳云食指（楊氏漢語抄云頭指比止佐之乃指）第二指也」（廿③13オ形體部・手足類）→「食指　（ショク）ヒトサシノユヒ」（人体・下93オ1）

【法華経】

和名抄中の「法華経」は左の三例であり、字類抄の注記とは一致しない。三巻本字類抄出典注記のうち仏書が「法華経」と「真言書」のみであることは峰岸氏（1964）も指摘されている。

「舎利　法華經云以佛舎利起七寶塔」（廿⑬1ウ調度部・佛塔具）→なし、「箜篌　法華經云起七寶塔懸諸幡蓋又云簫笛箜篌種々儛戲以妙音聲歌唄讃頌（箜篌二音俗云空古）」（廿⑬2オ調度部・佛塔具）→「箜篌　（クウコ）クコ」／佛塔具／又樂器也」（雑

物・中黒76オ3)「箜篌　コウヽ俗／音樂具」(雑物・下6ウ4)、「僧坊　法華經云起塔寺及造僧坊他經等或云僧房供養衆僧其德最勝無量無邊」(廿⑬2ウ調度部・佛塔具)→「僧房　ソウハウ／又坊」(地儀・中黒15ウ4)

【新撰万葉集】

①和名抄(廿⑳2オ　草木部・草類「女郎花　新撰萬葉集云女郎花倭歌云女倍芝〈平美那閑之今案花如蒸粟也所出未詳〉」

②和名抄(廿⑳1ウ　草木部・草類「蘭　兼名苑云蘭一名蕙〈關恵二音和名本草云布知波賀萬新撰萬葉集別用藤袴二字〉」

これらは字類抄の注記とも一致しており、和名抄を引いた傍証となろう。和名抄中の「新撰万葉集」ほか五例(左)を見ると、和名抄に「新撰万葉集云」等として示された項目や字体は、見出し語であるか如何に関わらず、全て字類抄に収録されていることが分かる。字類抄編者が「新撰万葉集」を重要な資料と位置付けていたことが窺われる。

「蚊火　新撰萬葉集歌云蚊遣火〈加夜利比今案一云蚊火所出未詳但俗説蚊遇煙即去仍夏日庭中熏火放煙故以名之蚊見虫多部〉」(廿⑫12オ燈火部・燈火類)→「蚊遣火　カヤリヒ」(雑物・上100オ3)、「繰箏　説文云箏〈芳無反與敷同〉繰絲管也漢語鈔云〈久太〉辨色立成云管子〈和名同上〉新撰萬葉集亦用之」(廿⑭12ウ調度部・織機具)→「繰箏」〈フ〉在侍言／クタ／クタカフル　管子　同」(雑物・中黒76オ4)、「鍬　唐韻云鍬〈音斯和名賀奈辨色立成用曲刀二字新撰萬葉集用鉈字今案鉈字所出未詳但唐韻有鉈視遮反一音夷短矛名也可為工具之義未詳〉平木器也釋名云鍬有高下之跡鍬以此平其上也」(廿⑮12ウ調度部・工匠具)→「鍬　〈シ〉カナ　鋤　同／俗用之　曲刀　同」(雑物・上99ウ5)、「鹿鳴草　爾雅集注云萩一名蕭〈萩音秋一音焦蕭音宵和名波木今案牧名用萩字萩倉是也辨色立成新撰萬葉集等用芧字唐韻芧音胡誤反草名也國史用芳亘草三字楊氏漢語抄又用鹿鳴草三字並本文未詳〉」(廿⑳2ウ草木部・草類)→「萩　〈シウ〉ハキ　鹿鳴草　〈ロクメイ〉同　蕭　〈セウ〉同　芧　同／芧異本　蔡　同　莪　同」(植物・上20ウ7)、「薄　爾雅云草聚生曰薄〈新撰萬葉集和歌云花薄波奈須々木今案即厚薄之薄字也見玉篇〉辨色立成云芊〈和名上同今案芊音千草盛也見唐韻〉」(廿⑳3オ草木部・草類)→「花薄　〈ハク〉ハナスヽキ」(植物・上21オ1)

【扶桑略記】

和名抄成立以後の国書であるため、字類抄が独自に採録したか、別の書に拠るものである。『訓点語彙集成』に拠れば、三教指帰注集長承三年(1134)点、三教指帰久寿二年(1155)点に「歯　ツラナラム」の訓がある。三教指帰原文は「不自衒以歯槐棘(自ら衒はずして槐棘に歯(つらな)る)」(巻上・大系九九頁)。

【日本記】(日本紀)

和名抄巻一中の「日本紀」は左の六例である。字類抄天象部また地儀部に引かれているが、「日本紀」注記は継承さ

れない。なお関連する字類抄出典書名には「日本私記」「国史」もある。

「陽烏　歴天地經云日中有三足烏赤色今案文選謂之陽烏日本紀謂之頭八咫烏田氏私記云〈夜太加良須〉」（廿①1オ天部・景宿類）→「陽烏　〈ヤウソ〉ヤカタアラス（ママ）　頭八咫烏　同」（天象・中黒82ウ2）、「沫雪　日本紀云沫雪〈阿和由岐〉其弱如水沫」（廿①5ウ天部・風雪類）「沫雪　アハユキ」→（天象・下24ウ1）、「磐　陸詞云磐大石也音盤和名〈以波〉日本紀云千人可引磐石〈和名知比木乃以之〉」（廿①8ウ地部・巌石類）→「磐　イハ　大石也／山石之安者也」（地儀・上2ウ5）、「畯　玉篇呼旦反耕麥地也唐韻畯耕田壠日本紀師説〈八太介〉」（廿①12オ地部・田園類）→「畠　〈ハク〉ハタケ／白田二字也／作一字訛也　壠　同　陸田　同」（地儀・上20オ7）、「妙美井　日本紀云妙美井〈之三豆〉」（廿①15オ水部・水泉類）→「「妙美井　シミツ」（地儀・下黒67ウ8）、「溟渤　冥勃二音〈和名於保岐宇三〉見日本紀也」（廿①16ウ水部・河海類）→「溟渤　オホウミ／冥勃／オホキウミ」（地儀・中黒62ウ7）

【史記】

『假名遣及假名字體沿革史料』（大矢透）に拠れば、史記抄文明九年（1477）点に「不〈アラス〉苦〈ユカミ〉窋〈イシマ〉」、史記永正八年（1511）点に「不苦〈ユカミ〉窋〈イシマアラ〉」の訓がある。和名抄の中の「史記」は次の一〇例である。字類抄が和名抄の見出し語や注文を引くものが多いが、「史記」の名は残らない。

「暴風　史記云暴風雷雨漢鈔云〈八夜知又乃和木乃加世〉」（廿①5オ天部・風雪類）→「暴風　〈ホウ〉ハヤチ／又ノワキ」（天象・上20オ2）、「相工　史記云長安中有相工田文者相工俗云相人相音〈去声〉丙丞相韋丞相魏丞相微賤時會於客宇田文曰此君皆丞相也其後三人竟為丞相也」（廿②8ウ人倫部・工商類）→「相工　〈シヤウ〉サウコウ／相人也」（人倫・下44ウ5）、「縱理　史記云縱理〈如字入縱理口餓死之相也〉」（廿③5ウ形體部・鼻口類）→「縱理　〈シヤウリ〉タヽシハ／ーー入口餓／死相也」（人体・中黒3オ5）、「吭　史記云絶亢而死〈亢音胡郎反又去声亦唐韻從口作吭訓上同俗云乃無止布江〉」（廿③6オ形體部・鼻口類）→「吭　〈カウ〉フエ　胡郎下浪二反／鳥喉也」（動物・中黒102オ1）「吭　ノムトフエ下浪也／鳥喉也」（動物・中黒58ウ7）、「褌　方言注云袴而無跨謂之褌〈音昆和名須萬之毛能一云知比佐岐毛乃〉史記云司馬相如著幘鼻褌韋昭曰今三尺布作之形如牛鼻者也唐韻云松〈臟容反與金同楊氏漢語抄云松子毛乃之太乃太不佐岐一云水子〉小褌也」（廿⑫22オ装束部・衣服類）→「褌　〈コン〉スマシモノ／又チキサキモノ」（雑物・下116オ6）、「偶人　史記云土偶人木偶人〈偶音五猶反俗云人形〉野王案凡削物為人像皆曰偶人也」（廿⑬7オ調度部・祭祀具）→「偶人　〈コウ〉ヒトカタ／土ーー木／ーー木也」（人倫・下92ウ5）、「俎　史記人為刀俎我為魚肉〈俎

音阻和名末奈以太〉開元式云食刀切机各一今案切机即俎也」（廿⑭7ウ調度部・厨膳具）→「俎　マナイタ／音祖　切机　同」（雑物・中黒92オ1）、「机〈牙脚附〉　唐韻云机〈音與几同和名都久恵〉案屬也史記云持案進食〈案音與按同〉唐式云行床牙脚〈今案行床者食床屬也牙脚者今所謂牙像脚也〉」（廿⑯5オ器皿部・木器類）→「机　〈キ〉案屬也　案　同」（雑物・中黒24オ7）、「簋　方言注云籠形小而高者江東呼為簋〈呼擊反漢語抄云阿自賀〉今案又用篔字見史記」（廿⑯9オ器皿部・竹器類）→「簋　〈ケキ〉アシカ」（雑物・下32ウ5）、「強飯　史記云廉頗強飯斗酒食肉十斤〈飯音符萬反亦作餅餈強飯和名古八伊比〉」（廿⑯13オ飲食部・飯餅類）→「強飯　〈キヤウハン〉コハイヒ／飯字亦作餅」（飲食・下6オ7）

【文選】

和名抄巻一中の「文選」は左の五例である。また字類抄中には「文選読」の語のあることが知られる。中村氏（1981）にも御論稿がある。

「陽烏　歴天地經云日中有三足烏赤色今案文選謂之陽烏日本紀謂之頭八咫烏田氏私記云〈夜太加良須〉」（廿①1オ天部・景宿類）→「陽烏　〈ヤウソ〉ヤカタアラス（ママ）　頭八咫烏　同」（天象・中黒82ウ2）、「飄　文選詩云回飄卷高樹兼名苑云飄暴風從下而上也音焱〈和名豆無之加世〉」（廿①5オ天部・風雪類）→「飄　〈ヘウ〉／ツムシカセ　旋風　同」（天象・中黒20オ4）、「霙　孫愐云霙雨雪相雜也音於鶯反文選雪賦師説曰〈三曽禮〉」（廿①6オ天部・風雪類）→「霰　〈サン〉ミソレ　蘇細反雨雪雜也／又作霹銀丸　霙　同　雨雪　同」（天象・下黒60ウ4）、「泊湘　唐韻云淺水貌也白柏二音文選師説〈左々良奈三〉」（廿①14オ・水部・水泉類）→「泊湘　〈ハクハク〉サヽラナシ」（地儀・下42ウ1）、「渴　文選海賦云海溟廣渴思積反與昔同師説〈加太〉」（廿①18オ・水部・涯岸類）→「渴　〈セキ〉カタ」（地儀・上91ウ2）

【或人】

②「薪　纂要云火木曰薪〈音新和名多岐々〉」（和名抄廿⑫13オ燈火部・燈火具）

和名抄、図書寮本名義抄に「ミカマキ」訓はない。字類抄には別に「タキヽ」が立項される。

［注］

1　『色葉字類抄研究並びに総合索引』（中田祝夫・峰岸明編／風間書房／1977）所収解説編「七　辞書史上における意義（本書の性格／その先蹤／その影響）」より引用。同様の内容は峰岸（1964）に初出。

2　一部の漢籍の典拠については佐藤喜代治氏に御論稿・御著書がある（「色葉字類抄考証」『「色葉字類抄」略注』）。また七巻本『世俗字類抄』の出典については三宅ちぐさ氏（1978）に御論稿がある。また『伴信友校蔵書第六四『色葉字類鈔（抜萃）』（書入本）」

（京都大学蔵写本、抄出内容は一〇巻本伊呂波字類抄）第一丁には、「引用スル処ノ皇国古書」名が一部挙げられている。

3 峰岸氏は前田本の存する部分に限られたが、ここでは前田本の欠ける部分は黒川本を以て補い再調査した。また書名のみでなく「或説」「或人」なども採った（ただし単に「或」とあるものは採らなかった）。黒川本には「私曰―」などとして私説が追加される場合があり、特に出典注記の認定には注意を払わねばならないが、所在の巻数下に「黒」を付すことで判断の一助としたい。一例のみの出典で未考のものがあるが、全体像を示すために一覧に残した。

4 和名抄に見えない項目については特に注記しない。

5 高橋宏幸「「マグル」考―「卒死」の訓読―」（語学文学）15／1977）

6 前田本の欠損部分を黒川本で補った。

7 音読と訓読の両者が示されかつその頭音が同じ場合、訓読語に数えた。また54雌黄の和名抄注文内に「一名金液」とある55金液（シ篇）は音読語として一語に数えた。

8 中田・峰岸（1977）解説三九頁。

9 （表2-2）ア・ツ・コ篇参照。管見に入った一〇巻本・二〇巻本の諸本でも同様の傾向である。

10 和名抄の★は和訓を伴わないもの、字類抄の★は音読語として立項されたものを示す。

11 「葉」を含む熟語は「竹葉、椿葉、落葉、杏葉」ほか、字類抄にも少なからず見えるが、「黄葉　モミチ」のような熟字訓を除けば基本的には音読みで採られており、「一ノハ」のような複合和訓は見えない。筆者は以前修士論文中に字類抄語彙と歌語辞書収録語彙との比較を行い、「動植物名・地名・熟字訓を除き、「白露」「千代」「雲井」「玉緒」などの歌語が字類抄に摂取されず、さらに単字に分解した際にそれぞれの字の読みや意味が保たれている熟語（「春風」「谷川」等）は、熟語の形では収録されない」傾向を確認した。それは単字の組み合わせで無限に広がる熟語の採集を制限すると同時に、読みから漢字を索める目的には単字での収録で十分なためと推測できる。無論、漢字表記語を収録する字類抄と仮名書きが主である歌語では語位相が異なるのであるが。

12 A「櫟球」に関しては峰岸（1964）の脚注に言及がある。

13 字類抄編者の創意に拠るものか、別の引用書が在るのかはまた別に考えなければならない。特に基本的な語彙は、見出し語の一致のみによって必ずしも特定の辞書を引用したとは言えず、注文の一致や特殊な熟語の掲出も含んだ調査でなければならない。

14 先行辞書類と『本草和名』との関係についての先行研究はよく行われているようであるが、字類抄について詳細に検討されたものは未だ見ない。筆者が字類抄植物部語彙を概観したところ、①『本草和名』にあり和名抄にないもの②『本草和名』になく和名抄にあるもの③どちらにもあるもの④どちらにもないものが混在しており、さらに①～③の語の字類抄中の排列が特に原書の排列を保存しているようには見えない場合が多かった。字類抄の引用

態度の問題として改めて綿密な調査が行われるべきである。

15 「いろは字類抄」の編纂にあたり、『新撰字鏡』が直接参照された可能性はまずないと考えられる」（三宅 1999）

16 萩原氏（2007）も「『東山往来』と『色葉字類抄』とだけに見られる確実な繋がりを実証できる語は、そう多くはない」とされている。

［参考文献］＊諸索引の他、類聚名義抄の出典をめぐる諸論考についても参照したが、紙幅の都合上省略した。

上田萬年・橋本進吉『古本節用集の研究』（東京帝國大學／1916）

河村正夫「伊呂波字類抄の成立に就いて」（「国学」4／1936）

吉田幸一「和名抄引用書名索引（上）」「同（下一）」「同（下二）」（「書誌学」10-4・11-1・11-5／1938）

川瀬一馬『古辞書の研究』（大日本雄辯會講談社／1955、増訂再版・雄松堂出版／1986）

築島裕「訓読史上の図書寮本類聚名義抄」（「国語学」37／1959）

峰岸明「前田本色葉字類抄と和名類聚抄との関係について」（「国語と国文学」41-10／1964）

吉田金彦「詩苑韻集の部類立てと色葉字類抄」（『本邦辞書史論叢』／三省堂／1967）

浜田敦「和名類聚抄」（『本邦辞書史論叢』／三省堂／1967）

若杉哲男「世俗字類抄・節用文字から色葉字類抄へ」（『本邦辞書史論叢』／三省堂／1967）

築島裕「和訓の伝流」（国語学82／1970）

中田祝夫・峰岸明編『色葉字類抄研究並びに総合索引』（風間書房／1977）

三宅ちぐさ「七巻本『世俗字類抄』にみられる出典注記」（「岡大国文論稿」6／1978）

中村宗彦「『色葉字類抄』補訂試稿—文選出典訓を中心に—」（「大谷女子大国文」11／1981）

村田正英「三巻本色葉字類抄における和名類聚抄和訓の受容「（『鎌倉時代語研究』5／武蔵野書院／1982）

原卓志「色葉字類抄における掲出語の増補について—和名類聚抄との比較を通して—」（「国文学攷」97／1983）

杉本つとむ「和名類聚抄の問題点」（『和名抄の新研究』／桜楓社／1984）

村田正英「色葉字類抄における和名類聚抄掲出語の受容—特に「人体」部について—」（『鎌倉時代語研究』7／武蔵野書院／1884）

原卓志「色葉字類抄における類書の受容」（「広島大学文学部紀要」

44／1984)
原卓志「色葉字類抄における和訓の増補とその表記形態」(「国文学攷」102／1984)
佐佐木隆「「類聚名義抄」「色葉字類抄」所引の「和名類聚抄」」(「国語と国文学」61-9／1984)
三宅ちぐさ「「いろは字類抄」と『和名類聚抄』」(「東海学園女子短期大学紀要」22／1987)
佐藤喜代治「『本朝文粋』の和訓—『色葉字類抄』との関連において」(「文芸研究(東北大学)」122／1989)
宮沢俊雅「倭名類聚抄諸本の出典について」(「北海道大学文学部紀要」45-2／1997)
三宅ちぐさ「「いろは字類抄」と『新撰字鏡』の関わり—重点・畳字(連字)の場合—」(「就実語文」20／1999)
山本秀人「改編本類聚名義抄における増補された和訓の色葉字類抄との関係について」(「高知大国文」31／2000)
三宅ちぐさ「「いろは字類抄」と『新撰字鏡』の関わり—臨時雑要字の場合—」(「高野山大学国語国文」23-26／2001)
井上亘「古代の学問と「類聚」—宇多天皇宸筆『周易抄』をめぐって」(『日本律令制の展開』／吉川弘文館／2003)
大槻信「辞書と材料—和訓の収集」(『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』／汲古書院／2005)
萩原義雄「『色葉字類抄』が典拠とした往来物—『東山往来』の語彙を中心に比較検証」(「駒沢日本文化」1／2007)
舩城俊太郎「白氏文集と色葉字類抄」(「人文科学研究」121／2007)
舩城俊太郎「三巻本色葉字類抄に見いだされる唐時代の白話語の熟語—白氏文集からのそれを中心にして」(「人文科学研究」125／2009)

[付記]
・本稿は、訓点語学会第一〇五回研究発表会(二〇一一年一〇月一六日、於東京大学山上会館)の発表原稿の一部に加筆修正を施したものである。
・本稿では、原文引用の際に、一部通行字に改めた場合がある。
・本研究は、平成二三年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費／「色葉字類抄」を中心とする国語辞書史研究)による成果の一部である。

(ふじもと　あかり　日本学術振興会特別研究員・PD)